

## コリント人への手紙第一15章1-34節 「キリストのよみがえり」

### 1A 復活の事実 1-11

1B 人を救う福音 1-2

2B 復活の目撃者 3-8

3B 恵みによる宣教 9-11

### 2A 復活の否定 12-19

1B 宣教の虚しさ 12-15

2B 罪の中の滅び 16-19

### 3A キリストによる復活 20-28

1B 眠った者の初穂 20-23

2B 万物の服従 24-28

### 4A 今の生き方 29-34

1B 死後のいのちのための働き 29-32

2B 悪い習慣への戒め 33-34

## 本文

コリント人への手紙第一 15 章を見ていきます。とても長い章なので、二つに分割して、今日は 1 節から 34 節まで見ていきたいと思えます。パウロが、この手紙を、十字架につけられたキリストを伝えることから始まり、そしてこの章で、キリストの復活について語っているところで終わっていることが、とても印象的です。コリントにある教会には、いろいろな問題がありましたが、とどのつまり、キリストの福音である、その十字架と復活に根ざしていないということでしょう。今の教会においても、何か問題があるとすれば、キリストの福音に根ざしていないからと言えるのではないのでしょうか。

コリントの教会の人びとの一部に、死者の復活を否定する人々がいました。それに対する応答が、15 章の内容です。

### 1A 復活の事実 1-11

#### 1B 人を救う福音 1-2

<sup>1</sup> 兄弟たち。私があなたがたに宣べ伝えた福音を、改めて知らせます。あなたがたはその福音を受け入れ、その福音によって立っているのです。<sup>2</sup> 私がどのようなことばで福音を伝えたか、あなたがたがしっかり覚えているなら、この福音によって救われます。そうでなければ、あなたがたが信じたことは無駄になってしまいます。

パウロは、福音を改めて知らせました。彼らの救いがかかっているのは、この福音によるもので

した。「あなたがたがしっかり覚えているなら」と念を入れていますね。なぜなら、彼らがしっかりと覚えていないのではないか、という懸念があったからです。死者の復活はないというようなことを話しているのですから、彼らが福音をしっかり覚えているのか？と疑う余地があります。けれども、しっかり覚えていなければ、信じたといっても無駄になってしまう、つまり、救われているということが不確かになる、ということです。

私たちも今ここで、どのような言葉をもって救われているのか？を確かめていきましょう。はたして、自分がキリスト者だと言っていることが、何に拠り頼んでいることなのか？であります。いつの間にか、福音のことばではないところを救いの拠り所としているかもしれません。自分は教会に通っているということであるとか。自分は、バプテスマを過去に受けましたということであるとか。または、自分は、悪いことが起こらずに何か良いことが起こったから、とか。いつの間にか、救われている拠り所が、福音のことばとは異なるところになっているかもしれません。

## 2B 復活の目撃者 3-8

<sup>3</sup> 私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書に書いてあるとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、<sup>4</sup> また、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりに、三日目によみがえられたこと、

キリストが自分の罪のために死なれたこと、葬られて、三日目によみがえられたこと。これが福音のことばであり、最も大切なことだということです。そして、パウロは自分も受けたと言っています。ですから、私たちも問わないといけません。キリストが死なれたのは、自分の罪のためだとしていますか？そして、キリストは、確実に死なれて、葬られましたが、自分は死にましたか？罪の中で死んでいたこと、古い自分は死んでいるのであり、改善の余地もなく、救いようもないこと。けれども、キリストは、三日目によみがえりました。そのように、今、自分が生きているのは、キリストが生きておられるから、としていますか？福音に根ざしていなければ、肉の行いが様々な形で出てきます。ややもすると、信仰そのものからさえも離れてしまう恐れもあります。

それから、パウロは、「聖書に書いてあるとおりに」と二回、繰り返しています。パウロは、包み隠すことなく、ユダヤ人の信じてきた聖書の言葉を、神の言葉としてコリントの人たちに伝えています。まず、「聖書に書いてあるとおりに、私たちの罪のために死なれたこと」ということについては、私たちは数多くの箇所で見つけることができます。アダムが罪を犯してから、動物によるいけにえが始まり、その流された血によって罪が覆われるということがありました。モーセの律法の中に、それがいけにえの制度として定められました。そして預言として、私たちを救う方ご自身がいけにえになることがあります。詩篇 22 篇、「わが神 わが神 どうして私をお見捨てになったのですか。(1 節)」から始まる、メシアの苦しみ。それから、イザヤ 53 章には、「彼は私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために砕かれたのだ。(3 節)」という告白があります。

では、「聖書に書いてあるとおりに、三日目によみがえられたこと」というのは、どうでしょうか？ 体によみがえりについては、罪のためのいけにえについてのことよりも、それほど多く書かれていません。けれども、確実に書かれています。そもそも、モーセに対して主は、「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」と現れて、アブラハムもイサクも、ヤコブも、四百年後に生きているモーセの時に、生きているとして、死んだら終わりでないことをはっきりと示しておられます。そして、ヨブが、自分の体が重い皮膚病で衰えていた時に、こう告白しました。「ヨブ 19:25-27 私は知っている。私を贖う方は生きておられ、ついには、土のちりの上に立たれることを。26 私の皮がこのように剥ぎ取られた後に、私は私の肉から神を見る。27 この方を私は自分自身で見。私自身の目がこの方を見る。ほかの者ではない。私の思いは胸の内です。絶え入るばかりだ。」主が戻って来られて、この地上に立たれる時に、自分の肉からはっきりと神を見るのだと言っています。

そして、ダビデは、自分の世継ぎの子にキリストが現れるという約束を神から与えられていたもので、しばしば、メシアについての詩を歌いました。その中で復活を預言していました。詩篇 16 篇です、「16:10 あなたは私のたましいをよみに捨て置かず あなたにある敬虔な者に滅びをお見せにならないからです。」そしてダニエルは、はっきりと、人々がよみがえり、ある者は永遠のいのちに、ある者は永遠の滅びに至ることを預言しました。「12:2 ちりの大地の中に眠っている者のうち、多くの者が目を覚ます。ある者は永遠のいのちに、ある者は恥辱と、永遠の嫌悪に。」

けれども、ここで「三日目によみがえられたこと」とあります。旧約聖書の中で、三日目のよみがえりをどこで書かれているのか？ここは、旧約聖書というものが、直接的に言及している預言だけで成り立っておらず、その話の流れであるとか、言い回しであるとか、人の生涯を通してであるとか、キリストご自身が来られることを証するという形で書かれていることがある、ということ踏まえられないといけません。

その典型が、アブラハムがイサクを全焼のいけにえとして献げようとした時のことです。「創 22:2 あなたの子、あなたが愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そして、わたしがあなたに告げる一つの山の上で、彼を全焼のささげ物として献げなさい。」と主は言われました。「あなたが愛しているひとり子イサク」という言葉で聞き覚えがないですか？そう、ヨハネ 3 章 16 節です、「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。」父なる神が、その独り子を、罪のためのいけにえとしてお与えになる、ということが表れています。その後、アブラハムは、モリヤへの旅をヘブロンから始めました。「三日目に、アブラハムが目を上げると、遠くの方にその場所が見えた。」とあります(22:4)。その三日の間に、アブラハムはどのような心境であったのか、いや、どのような信仰を持っていたのかを、ヘブル人への手紙の著者が解説しています。「11:17-19 信仰によって、アブラハムは試みを受けたときにイサクを献げました。約束を受けていた彼が、自分のただひとりの子を献げようとしたのです。18 神はアブラハムに「イサクにあって、あなたの子孫が起こされる」と言われましたが、19 彼は、神には人を死者の中からよみがえ

らせることもできると考えました。それで彼は、比喩的に言えば、イサクを死者の中から取り戻したのです。」彼は、イサクが死者の中からよみがえるのだと信じて、それで神の命令に本気で従おうとしていました。だから、彼はイサクを屠る直前に、御使いに止められましたが、すでに彼の信仰の中では彼を屠っていたのです。そして、よみがえらせると信じていました。この信仰こそが、キリストの三日目のよみがえりを明らかにしていたのです。

<sup>5</sup> また、ケファに現れ、それから十二弟子に現れたことです。<sup>6</sup> その後、キリストは五百人以上の兄弟たちに同時に現れました。その中にはすでに眠った人も何人かいますが、大多数は今なお生き残っています。

福音の核心は、キリストの死と復活です。パウロは、その復活を詳しく語ります。数多くの目撃者がいることを書き記しています。初めに、ケファ、つまりペテロに現れてくださいました。そして十二弟子に現れます。福音書に、その出来事が書かれていますね。そして、五百人以上の兄弟たちに同時に現れたとありますが、イエス様はガリラヤに行きなさいと、御使いを通して伝えておられたので、ガリラヤで兄弟たちが集まっている時に、現れてくださったのかもしれませんが。そして、パウロは、その大多数が今も生きていますと言っています。つまり、これだけの目撃者がいて、この方がよみがえったのは、幻でも幽霊でもなく、誰かが作り出した話でもなく、事実なのだということです。

<sup>7</sup> その後、キリストはヤコブに現れ、それからすべての使徒たちに現れました。

エルサレムの教会において、指導者として立てられていたのは、ペテロだけでなくヤコブもそうでした。ペテロが初め指導者でしたが、彼がいろいろなところに巡回するようになり、遠くまで宣教旅行にも行っています。それで、エルサレム教会の監督はヤコブになっています。そのヤコブも、イエスの復活を目撃しています。彼は、イエス様の半兄弟です。ヨセフとマリアの間に生まれました。イエス様はマリアの処女懐妊によって聖霊によって生まれましたが、ヤコブはヨセフとマリアの間に後から生まれています。他の肉の兄弟たちと同じように、ヤコブはイエス様を主として信じていませんでした。けれども、ヤコブも他の半兄弟たちも信じたのは、イエス様が復活されてからです

そして、十二弟子以外の使徒たちにも、現れています。使徒と呼ばれている人々は、十二弟子だけではありません。「遣わされる」という言葉があれば、それは使徒とされることも訳すことができますが、例えばバルナバは使徒です。このように、すべての使徒たちも目撃したのであって、コリントの人たちにある、死者の復活はないという主張に、事実をもって対抗しているのです。

<sup>8</sup> そして最後に、月足らずで生まれた者のような私にも現れてくださいました。

パウロは、復活の目撃者の最後に入れてあります。時間的にも、エルサレムにおいて彼自身も関

わっている、教会に対する迫害の後、彼自身がキリストの弟子たちを捕縛するためにダマスコに行く途上で、復活の主が現れてくださいました。けれども、時間的だけでなく、パウロは、「月足らずで生まれた者のような私」つまり、こんなにも取るに足りない者にも、現れてくださったのだと、へりくだっています。

### 3B 恵みによる宣教 9-11

キリストの復活は、このように目撃者による証言によって、その事実が確かなものとなりましたが、パウロのような人が、全く変えられたということ。変えられた人生も、復活の強力な証拠です。

<sup>9</sup> 私は使徒の中では最も小さい者であり、神の教会を迫害したのですから、使徒と呼ばれるに値しない者です。

パウロが、なぜ月足らずで生まれた者、使徒の中で最も小さい者と呼んでいるかと言いますと、神の教会を迫害したからです。これを死に値する大罪と彼は見なしていました。この圧倒的な罪深さを、神は恐れるほどの憐れみをもって、彼の罪を見逃してくださいました。テモテへの第一の手紙で、彼は自分のことを「罪人のかしら」と呼んでいます(1:15)。

<sup>10</sup> ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは無駄にはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。働いたのは私ではなく、私とともにあった神の恵みなのですが。

そうです、圧倒的な神の恵みによって、自分が今の自分なのだということです。全く受けるに値しない、とてつもない豊かな憐れみを受けた時に、人は変わります。自分が変わるのは、自分の行いによるものではありません。いや、自分の行いが非の打ちどころがないと思われても、パウロのように、教会を迫害するような罪を犯すのです。人の義は不潔な着物のように汚れています。人が変わるのは、圧倒的な神の恵みなのです。この方の恵みに触れれば、それは何をしてもかまわな、すべてが赦されるというような、安価なものではなく、むしろ、あまりにも圧倒的な恵みなので、神の前で震えるような畏怖を抱きます。ペテロが、私のような罪人から離れてくださいとイエス様に言ったような、畏怖の念です。そのような恵みを受けた者が、変えられていきます。

興味深いことに、パウロが、自分の働きが自分ではなく、神の恵みだと言っています。使徒たちの中で最も多くの働きをしたと言っています。これは、客観的にその通りですね。宣教の旅の領域は、アンティオキアからギリシアへ、そしてローマにまで至ります。そこで建て上げられた教会は、数知れません。そして新約聖書は、実にローマ人への手紙から、ピレモンへの手紙までがパウロによるものです。他の使徒たちよりも多くの働きをしたというのは、誇張でも何でもありません。しかし、それは自分の頑張りではなく、神の恵みによるものなのです。

キリスト者としての献身的な働きを、何らかの形で否定的に見る人々が多いです。例えば、献金は、自分の受けた恵みを神さまに現す、これまた恵みのある行為です。けれども、献金が過度に強調されたことのある人は、献金という言葉を目撃しただけで拒否反応が出てしまいます。強いられて奉仕をさせられた人々は、教会の奉仕から一歩、引いてしまいます。私は、ある牧師さんに、迫害を受けている教会の人びとから学ぶことができる話をしたら、否定的な反応が帰ってきました。変だなと思ったら、背景が、教会で過度に世界宣教が強調されていたことがあるようです。「あなたの飲む、一杯のコーヒーで、一日分の食べ物を貧しい子供に挙げるができるのです。」と言って、私たちの暮らしの一つ一つのことが、献げ物の対象になることのように話されたようです。

こうした強調の何が間違っているのか？それは、「あなたが、これこれのことをすれば、神が働いてくださる。」というもののなのです。この働きは、あなたの献身にかかっていると教えられたのです。そう教えていなくても、結果的に、そのようなメッセージを受け取ったので、献身的なわざに対して反発が来るのです。神が自分に大いなることをしてくださって、それで神の語りかけに自分が応答することによって、初めて献身的な働きができます。自分が何かをやってそれで神が応答されるのではなく、その逆で、神がしてくださったことの応答として献身的な働きができるのです。

<sup>11</sup> とにかく、私にせよ、ほかの人たちにせよ、私たちはこのように宣べ伝えているのであり、あなたがたはこのように信じたのです。

以上が、パウロも他の人々も宣べ伝えている福音で、そこにはキリストの復活の事実があるということです。そこで次から、死者の復活を否定している者たちに語り始めます。

## **2A 復活の否定 12-19**

### **1B 宣教の虚しさ 12-15**

<sup>12</sup> ところで、キリストは死者の中からよみがえられたと宣べ伝えられているのに、どうして、あなたがたの中に、死者の復活はないと言う人たちがいるのですか。

午前礼拝でも話しましたように、コリントの人たちは、確かにパウロや他の人びとから、福音を聞き、そのことばには、キリストの復活がありました。けれども、世の考え方や、今の世の楽しみのほうに気が逸らされて、死者の復活を否定するような人々が現れたのです。ギリシア人の考え方には、身体がよみがえるということが受け入れられないものがあります。身体に囚われないことこそ、人は自由になるのだと考えていました。また合理主義があったでしょう。どうして、身体がよみがえることがあるのか？と。サドカイ派の人たちは、イエス様に、妻が七人の夫と生き別れてしまったら、復活した時はだれの妻になるのかという問いに対して、「マタ 22:29 あなたがたは聖書も神の力も知らないで、思い違いをしています。」と言われました。どのような体でよみがえるのか、と、どうしても理屈にかなわないとして退けてしまうのです。しかし、聖書はそう書いてあるし、神は何でも

おできになる方です。

私たちは、世に生きているといつの間にか、その考えに引きずられてしまうことがあります。その結果、信仰を持っていない人たちのほうが、私たちの信仰を客観的に見ていることさえあります。キリスト者の遺伝学者が書いた本で、進化論を受け入れている、有神進化論に基づいています。<sup>1</sup>神が進化論の過程を経て、天地を造られているという考えの内容です。つまり、天地創造の記述が、比喩的なものなのだ、文字通り受け取るべきではないとするものです。そのことに対して、キリスト者ではない方の読後の感想がこういうものです。「創世記を字句通りに信じる必要はないとするならば、新約聖書に書かれたキリストの復活はどうなのでしょう。クリスチャンにとってはここは信仰の本質に関わる部分ではないのかなと想像するのですが、生物学者として筆者はこれも象徴的・寓話的と考えるのでしょうか。」天地創造をそれが歴史的事実と信じられないのであれば、ましてや、復活はなおさらのことそうではないか？けれども、キリスト者の信仰の本質に関わることなのでは？ということ。凶星です！

ちなみに、天地創造と、復活を直結させています。これも正しいことで、キリストの復活と、それに連なるキリストに属する者たちの復活は、実は天地創造のやり直し、新しい創造の始まりだからです。キリストがよみがえられたことにより、それが新天新地にまでつながり、壮大なドラマ、神の救いのご計画なのです。ですから、天地創造が事実として信じられないのであれば、ましてや、新しい創造の始まりであるキリストの復活は、ましてや事実として信じられないだろうというのは、実に的確です。今日のキリスト教会でも、合理的な考えに囚われたり、世の考えに囚われて、聖書と神の力を信じられなくなっている人々がいます。

<sup>13</sup>もし死者の復活がないとしたら、キリストもよみがえらなかつたでしょう。<sup>14</sup>そして、キリストがよみがえらなかつたとしたら、私たちの宣教は空しく、あなたがたの信仰も空しいものとなります。

パウロはまず、キリストの復活がなければ、宣教が空しいもの、実質のないものになると論じています。そのとおりですね、「イエス・キリストを信じなさい。そうすれば救われます。」と宣べ伝えても、イエス・キリストがもう既に死んでいるのなら、そのことばは全く意味のないものになってしまいます。他の宗教では、その宗教の創始者が死んで、今いなくても問題はありません。彼らが信じているのは、宗教の創始者ではなく創始者が説いた教えであるからです。ムハンマドを信じなさい、とイスラム教は教えません。また、「仏陀を信じなさい。」と仏教は教えません。しかし、キリスト教は、イエス・キリストご自身を信じているのです。この方自身が、信仰の対象になっているのです。この方と生きた関係を持つことが、永遠のいのちなのです。ですから、キリスト教からキリストの復活をなくせば、青空から青を除いたものとなり、全く意味のないものになります。

---

<sup>1</sup> <http://www.logos-ministries.org/blog/?p=2728>

<sup>15</sup> 私たちは神についての偽証人ということにさえなります。なぜなら、かりに死者がよみがえらないとしたら、神はキリストをよみがえらせなかったはずなのに、私たちは神がキリストをよみがえらせたと言って、神に逆らう証言をしたことになるからです。

そうですね、宣教をしている人々はみな、ペテン師であります。偽物をつかまされているのです。ですから、仮にみなさんの中で、「それでも、本当に死者がよみがえるのかな？」と思って聞いていたとしましょう。そうしたら、今、このようにして礼拝を献げている時間、すべてが無駄に費やされたということになります。偽物に大切な時間、そして心も魂もつぎ込んだということになります。私は、大ウソつきで、みなさんを騙すことに成功したことになります。キリストはすでに死んでいるのに、よみがえったと嘘をついていることになります。それだけ、「本当に死者がよみがえるのかな？」という疑いは、自分のしていることを自分で全否定することにつながるのです。

## 2B 罪の中の滅び 16-19

<sup>16</sup> もし死者がよみがえらないとしたら、キリストもよみがえらなかったでしょう。<sup>17</sup> そして、もしキリストがよみがえらなかったとしたら、あなたがたの信仰は空しく、あなたがたは今もなお自分の罪の中にいます。

信仰が空しくなり、未だ罪の中にいると言っています。これは、どういうことでしょうか？罪から解放される力は、キリストの復活にかかっているということです。パウロは、ロマ 4 章の終わりでこう言っています。「4:25 主イエスは、私たちの背きの罪のゆえに死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられました。」

主イエスが、背きの罪のために死に渡されました。身代わりになられて死なれたのです。この方が正しい方であり、十字架の死に至るまで正しかったことが、よみがえりによって明らかにされました。この方は正しい方、聖なる方なので、罪の結果である死の中に留まることはなかったのです。無罪の人が、裁判によって冤罪になっても、正しい裁きがあるならば、いつか必ず冤罪が晴れて、釈放されます。罪を犯していないのですから、釈放される力を持っているのです。それと同じように、神がキリストをよみがえらせることによって、死という縄目に囚われることがなく、よみがえりによって解放され、この方がご自分の正しいしもべであることを明らかにされたのです。

その義なるキリストを私たちは、信仰を通して身に着けさせていただいたのです。私たちの義ではなく、この方の義のわがが私たちに与えられました。それが義認です。ですから、罪が赦されるだけでなく、一度も罪を犯したことのないようにみなされ、キリストのように正しいとみなされます。もはや、自分が生きているのではなく、キリストが生きて下さり、私たちはキリストを信じる信仰で生きるのです。(ガラ 2:20)これが、「私たちが義と認められるために、よみがえられました」の意味です。ですから、キリストのよみがえりがなければ、罪に対する力に打ち勝てないということです。



未だ、罪の下にいるということです。

<sup>18</sup> そうだとしたら、キリストにあって眠った者たちは、滅んでしまったことになります。<sup>19</sup> もし私たちが、この地上のいのちにおいてのみ、キリストに望みを抱いているのなら、私たちはすべての人の中で一番哀れな者です。

罪の中にいるのですから、死んでしまったらそれで終わりです。罪の力が死なのです。キリストのよみがえりがないのですから、死んでもそのままです。ですから、キリスト者で先に死んでしまった人々は、本当にいなくなってしまうと、天において再会できる望みなどありません。自分自身でさえ、天に入る望みがありません。つまり、この地上でのいのちで満足しているのです。実質のない信仰なのです。

これは、実に哀れなことです。一般の日本の方々には、神々とは軽い付き合いをして、年に一度、お賽銭を投げ入れて、手を叩いて、祈るだけでいいと考えるのでしょう。しかし、私たちは違います。主を第一にし、主への礼拝を第一にします。生活でどんなことがあっても、主の前に出ることが一番なのです。ところが、これほどの献身をしていて、それが中身のないものであれば、どうでしょうか？「私たちはすべての人の中で一番哀れな者」です。

### **3A キリストによる復活 20-28**

#### **1B 眠った者の初穂 20-23**

<sup>20</sup> しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。<sup>21</sup> 死が一人の人を通して来たのですから、死者の復活も一人の人を通して来るのです。<sup>22</sup> アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストにあってすべての人が生かされるのです。

午前礼拝でお話ししました、死者の復活とは、キリストの復活のいのちにある復活です。イエスご自身がよみがえり、いのちであられ、罪のもたらす死そのものにも打ち勝ったのですから、この方を信じる者も、この方にあって罪に打ち勝ち、罪のもたらす死そのものにも打ち勝ちます。

パウロは、ここでイエス様のよみがえりを、「初穂」と言っています。ユダヤ人には、初穂の祭りがあります(レビ 23:10-14)。過越の祭りの三日目です。大麦の初穂を主に献げます。初穂は、これからの収穫の初めであり、また第一の収穫です。この収穫が後の収穫全体を代表します。ここでの全体の収穫というのは、死者の復活です。キリストがよみがえられたことによって、この方を信じる者たちもよみがえるのです。

そして、かつてローマ人への手紙5章にて、アダムがキリストの型であることを学びました。アダムが罪を犯したので、世界に罪が入り、死が入ったように、キリストの義の行いによって、信じる者

んすべてが義と認められるようになった、ということをお話していました。同じように、一人の人、イエス・キリストによって、いのちが信じる者、すべてに与えられました。

<sup>23</sup> しかし、それぞれに順序があります。まず初穂であるキリスト、次にその来臨のときにキリストに属している人たちです。

私たちの世界に、いのちが入りました。正しい方が私たちの罪のために死なれて、そして、よみがえられました。この方が代表となり、初穂となり、そこから世界が、罪と死に支配されていたのですが、そこから義といのちの支配が始まりました。

主がよみがえられてから、早速、墓から出てきた聖徒たちがいます。「マタ 27:51-53 すると見よ、神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。地が揺れ動き、岩が裂け、52 墓が開いて、眠りについていて多くの聖なる人々のからだが生き返った。53 彼らはイエスの復活の後で、墓から出て来て聖なる都に入り、多くの人に現れた。」旧約の時代の聖徒たちの一部です。そして、エペソ 4 章には、「彼はいと高きところに上ったとき、捕虜を連れて行き、人々に贈り物を与えられた。(4:8)」とあり、これは、イエス様が昇天された時に、まず地の深いところに下られ、そして、捕らわれている人々を連れていかれた、ということになります。旧約の時代の聖徒たちは、金持ちとラザロの話を見る限り、アブラハムのふところという、陰府にあるところにおいて、贖いを待っていたのであろうと思われます。キリストが血を流され、死なれたことによって、天の聖所への道が開かれ、それで彼らが天に上げられることができました。

そして、教会の携挙があります。それが、ここに書かれているように、「その来臨のときにキリストに属している人たち」であります。その時に、キリストにあつて眠った人々がまずよみがえり、生き残っている人々も空中にまで引き上げられて、主とお会いするのです( I テサ 4 章)。

それから、地上は大患難に入ります。黙示録には、数多くの聖徒たちが殉教することが書かれています。患難時代にイエスを主として信じていく人々です。この人々が、主が地上に戻って来られる時に、よみがえります。「黙 20:4b-5 また私は、イエスの証しと神のことばのゆえに首をはねられた人々のたましいを見た。彼らは獣もその像も拝まず、額にも手にも獣の刻印を受けていなかった。彼らは生き返って、キリストとともに千年の間、王として治めた。5 残りの死者は、千年が終わるまでは生き返らなかった。これが第一の復活である。」第一の復活は、キリストのよみがえりのいのちにあずかることです。つまり、第一の復活は、キリストの復活から始まり、患難時代の聖徒たちの復活で完了します。

## 2B 万物の服従 24-28

<sup>24</sup> それから終わりが来ます。そのとき、キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼし、

王国を父である神に渡されます。<sup>25</sup> すべての敵をその足の下に置くまで、キリストは王として治めることになっているからです。

キリストがよみがえりの初穂となりました。それは、すべて信じる者たちへのよみがえりの力を与えます。しかし、それだけではありません。万物が、罪と死の下にあったのですが、キリストのよみがえりによって、義といのちの下に入ることになりました。贖われた者たちが、地上に現れることによって、罪と死の中でうめいていた被造物たちも、この方のいのちの解放の中に入れられるのです。つまり、キリストの復活は、新しい創造の始まりなのです！パウロが、私たちに対していった言葉は、私たちの内にある新しい創造、そして万物の新しい創造を意味しています。「Ⅱコリ 5:17 ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」

そして、「キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼし、王国を父である神に渡されます。」とあります。キリストの御力と支配、力、権威が復活によって現れました。世において、これら支配、権威、権力と呼ばれているものがあります。しかし、キリストの前では震え上がるしかないのです。主のよみがえりにおいて、墓の封印を破り、ローマ兵を死人のようにすることができました。この力が、ご自身の再臨の時に全開するのです。

詩篇 2 篇を開いてみてください。1 節から 3 節までに、神とキリストに対して立ち構えるために、地の王たちが相集まっている姿があります。けれども 4 節から 6 節で、神がそのことをあざ笑い、シオンに王を立てると宣言されます。それがキリストです。そして 7 節を読みます。「詩 2:7 私は【主】の定めについて語ろう。主は私に言われた。『あなたはわたしの子。わたしが今日あなたを生んだ。』これが、キリストが神の御子であることの宣言です。パウロは、ピシディアのアンティオキアのユダヤ教会堂で、この箇所を、キリストのよみがえりの箇所として引用しました。「わたしが今日あなたを生んだ。」というのは、この方がおぎやあと人間の赤ちゃんとして生まれたということではなく、正真正銘、神と同一の御子、神ご自身としての力が、復活によって現れたということです。「ロマ 1:3-4 御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、4 聖なる霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです。」

そして続けて読むと、8-9 節にこうあります。「2:8-9 わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与える。地の果ての果てまであなたの所有として。9 あなたは鉄の杖で彼らを牧し陶器師が器を砕くように粉々にする。」ここにある、「キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼす」ということでもあります。主が地上に再臨されて、世にあるすべての支配、権威、権力を滅ぼされるのです。私たちが、抗いがたい力に取り囲まれている時に、また世にある悲惨な出来事を見る時に、復活の主を仰ぎ見ることがどれだけ必要なことでしょうか。

<sup>26</sup>最後の敵として滅ぼされるのは、死です。

興味深いことに、「最後の敵」というのが死であります、悪魔ではないのですね。イエス様が、泣かれた時がありましたね。マルタとマリアの兄弟、ラザロが死んで、他の人々が泣き悲しんでいる時です。それは、同情して泣かれたのではなく、主は憤りを抱かれています。それは、死によって、このような涙と嘆き悲しみをもたらしているからです。本来、永遠に生きるはずだったアダムであったのが、罪を犯したので死が入り込んだのです。これこそが、最後の敵なのです。

黙示録をじっくりと読みますと、キリストが王となられて、キリストに属する者がキリストと共に統べ治める期間が、千年間であるとあります。20章です。この時に、世にある権力、支配、権威はみな、キリストに服しています。地上における神の国が、実現しているのです。しかし、悪魔は底知れぬ所で鎖につながれています。千年が立つと、悪魔が解き放たれ、その反逆に加担する者たちがエルサレムの都を取り囲みますが、火によって焼かれます。そして悪魔は、火と硫黄の池に投げ込まれるのです。

その後、最後の審判があります。白い大きな御座が現れて、大きな者も小さな者もよみがえります。そして、行いの書にしたがって裁かれます。ここの部分を読みます、「黙 20:13-14 海はその中にいる死者を出した。死とよみも、その中にいる死者を出した。彼らはそれぞれ自分の行いに応じてさばかれた。14 それから、死とよみは火の池に投げ込まれた。これが、すなわち火の池が、第二の死である。」海が、死者を出しました。いわゆる陰府の世界です。それが地の下にあるし、海の深みにあります。そして、神は、その者たちだけでなく、「死とよみ」もろとも、火の池に投げ込んでおられます。これが第二の死です。つまり、死そのものを滅ぼされたのです。そして、21章に入れば、新天新地には海さえないです。海もろとも、滅ぼされて、死というものが跡形もなくなるようにされたのです。

そして、天からエルサレムが降りてくる幻が、21章にあります。そこにこう書かれています。「21:4 神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しみもない。以前のものが過ぎ去ったからである。」死そのものがなくなったのです。死は、第二の死として火の池に投げ込まれています。

<sup>27</sup>「神は万物をその方の足の下に従わせた」のです。しかし、万物が従わせられたと言うとき、そこには万物をキリストに従わせた方が含まれていないことは明らかです。<sup>28</sup>そして、万物が御子に従うとき、御子自身も、万物をご自分に従わせてくださった方に従われます。これは、神が、すべてにおいてすべてとなられるためです。

地上にイエス様が再臨されて、王の王として千年間、君臨されます。それから、最後の審判で死

が滅ぼされ、新天新地にて天のエルサレムが降りてきます。そこでは、万物が神の支配の中に入っています。神が初めに天地を造られた時の秩序が、初めに造られた秩序以上にさらに神のものとなっているのです。初めの秩序には、エデンの園には、すでに蛇がいましたから。そして、天のエルサレムの情景を詳しく見ると、「神と子羊の御座」とあります(22:3)。ここの御座は、単数形になっていて、子羊なるキリストが神と一体になっておられる姿が現れています。これが、ここでパウロの説明している、「御子自身も、万物をご自分に従わせてくださった方に従われます。」ということです。御子が万物をご自身の下に従わせ、それからご自身が父なる神に従わせ、この方と一つになっているのです。そして、神がすべてにおいてすべてとなられています。

#### **4A 今の生き方 29-34**

このような将来が私たちを待っています。ですから、永遠のいのちが私たちにとっての生きる道であり、今のいのちが目標ではありません。その話を今から、コリントの人たちに話していきます。

#### **1B 死後のいのちのための働き 29-32**

<sup>29</sup> そうでなかったら、死者のためにバプテスマを受ける人たちは、何をしようとしているのですか。死者が決してよみがえらないのなら、その人たちは、なぜ死者のためにバプテスマを受けるのですか。

もし死者のよみがえりがなければ、死後のいのちがなければ、絶対におかしなことを、パウロは取り上げています。一つは「死者のためのバプテスマ」です。これが、一体何なのか？注解書を見ても、分からないというのが大概の見解です。なぜなら、他の箇所のバプテスマは、すべて生きている人が受けるもので、死んだ人たちのためにバプテスマを受けるような箇所は、ここにしか存在しないからです。ですから、この習慣を一般化するのは危険です。一つの解釈は、これは、コリントの教会でまさに行っていたということです。パウロは、否定していませんが、肯定もしていません。今は、死者のよみがえりについて話していて、死んだ人のためにバプテスマを授けると言うことは、その人がよみがえらなかったら、全く意味のないものになりますね？と語っています。

<sup>30</sup> なぜ私たちも、絶えず危険にさらされているのでしょうか。<sup>31</sup> 兄弟たち。私たちの主キリスト・イエスにあって私が抱いている、あなたがたについての誇りにかけて言いますが、私は日々死んでいるのです。

これは、イエス様が語られたことです。「マル 8:35 自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音のためにいのちを失う者は、それを救うのです。」後のいのち、つまり復活のいのちを信じているからこそ、今のいのちには死んでいくということです。人間には、自分を救おうとする欲求があります。けれども、永遠のいのちを信じている人たちは、そのために今のいのちに逆らうことも行うのです。例えば、世間がキリスト者に言うのは、「よくお酒も飲まないで、ストレスためな

いで平気でいられるね？」とか、私たちのような牧者の場合、「どうやって生活しているんですか？」と尋ねます。つまり、お金もうけしないで、どうやって生きられるのか？ということです。しかし、福音宣教のために一般の仕事をしていなくとも、みこころにしたがって、何らかの生活の支えが与えられます。もし、そういうことを気にしていたら、主のために働くことはできないし、キリスト者として生きていくことさえ、ままならないでしょう。

<sup>32a</sup> もし私が人間の考えからエペソで獣と戦ったのなら、何の得があったでしょう。

使徒たちは、生きた心地がしないところを多く通りました。「エペソで獣と戦った」というのは、エペソの劇場での騒動のことでしょう。使徒 19 章にあります。アルテミスの銀細工人たちが、パウロの福音宣教で、自分たちの神殿の模型の売り上げがあがったりになったので、騒動を起こしたのです。パウロは、ここで死にかけました。(Ⅱコリ 1:8-9)。こんな危険な状態になるのを、何の得があっているのですか？と言っています。もちろん、死後の命があって、その時に報いがあるからこそ、今のいのちを危険にさらすことを辞さないのです。

## 2B 悪い習慣への戒め 33-34

<sup>32b</sup> もし死者がよみがえらないのなら、「食べたり飲んだりしようではないか。どうせ、明日は死ぬのだから」ということになります。<sup>33</sup> 惑わされてはいけません。「悪い交際は良い習慣を損なう」のです。<sup>34</sup> 目を覚まして正しい生活を送り、罪を犯さないようにしなさい。神について無知な人たちがいます。私はあなたがたを恥じ入らせるために言っているのです。

死者のよみがえりを信じなかったら、この地上でのいのちしかありません。そうすれば、今の楽しみだけになってしまいます。とこしえの喜びなどありません。事実、死者のよみがえりを信じていなかったから、悪い交際をしていた人々がいたようです。それで、戒めます。目を覚ましなさい、正しい生活を送りなさい。そして、罪を犯してはいけない、と。イエス様がサドカイ人たちの復活への疑いについて、「聖書も神の力も知らない」と言われましたが、彼らも神に付いて無知だったのです。自分たちが何をしているかパウロが明らかにしているので、「私はあなたがたを恥じ入らせるために言っているのです」と言っています。気づいてほしかったんですね、目を覚ましてほしいと思いました。死者の復活の否定が今の恥ずかしい生活をしていることを知ってほしかったのです。

このようにして、私たちがいつの間にか、今の生活だけで精一杯になっていることがあります。そして、今の忙しさ、今していることが第一になります。けれども、私たちはその逆にしないといけません。永遠のいのちのために、自分の体が復活するのだということを知って、今を生きるのです。それは、いのちを捨てる、日々死ぬということになるのです。信仰によって、生きるのです。

例えば、以前、近親相姦の罪を犯している者を教会で許していることについて、過越の祭りとは種なしパンの祝いを取り上げて、それで、古いパン種を取り除きなさいと言いました。コリントの人たちには、全くそのような習慣がないけれども、それでもしっかりと教えたのです。ジョン・マッカーサーという牧師が、ベン・シャピロというユダヤ教の人がホストしている番組に出演しました。彼は、ベンさんに証したのです。「私は、旧約聖書があるから、クリスチャンになっているのです。」<sup>2</sup>ユダヤ人にはユダヤ人の聖書があり、異邦人には福音がある、ではないのです。ユダヤ人たちの聖書にこそ、異邦人をも救う、すべて信じる者に対しての福音が書かれている、ということです。

ところが、自分の信仰がいつの間にかすり替わっていて、自分が健康になりました、とか、困難な状況から救われましたとか、幸せな結婚生活を送れていますとか、福音のことばではないものが、いつの間にか自分の救い観になっている。それで救われているのだという気持ちになっていることがあります。ですから、何を信じて、救われているのかを確かめないといけません。

死者の復活の否定は、そのままキリストの復活の否定につながります。キリストも一度、死なれているからです。それだけでなく、20 節以降にあります、キリストがよみがえられたから、キリストに連なる者たちもよみがえるのです。

もしイエスが復活されなかったのなら、聖書に記された福音のメッセージは、実体のないむなしなものとなる。しかし事実、イエスは復活された。主イエスは、ローマの封印を破り、兵士たちを死人のようにすることができたお方である。このお方は今も、地上のあらゆる権威の上に立っておられる。死に勝利された復活の主イエスから目を離してはならない。きょうも、主イエスを仰ぎ見ながらこの世に出て行こうではないか。クレイから。

<https://www.facebook.com/mikiko.takada.96/posts/5370296276317970>

---

<sup>2</sup> <http://www.logos-ministries.org/blog/?p=8934>